



宗家文庫史料「日記類」(長崎県立対馬歴史民俗資料館収蔵)

対馬歴史民俗資料館報

第 27 号

平成16年 2月20日

編集・発行

長崎県立対馬歴史民俗資料館
 対馬厳原町今屋敷
 郵便番号817-0021
 電話(0920)52-3687

印刷所

諫早市長野町1007-2
 (株)昭和堂
 電話(0957)22-6000

平成十六年三月一日は、「対馬市」誕生の日です。隣島の「壱岐市」とともに、長崎県下第一号の「平成の大合併」のスタートとして県民の熱い注目を集めることとします。

「対馬が一つになる」といえば、近世の対馬藩政時代が思い起こされます。その対馬藩・宗家に伝わる「宗家文庫史料」は、江戸時代の鎖国体制の下で、わが国が唯一の隣国関係をもった朝鮮国との外交や貿易などについて、その詳細を記録にとどめたものです。一六三〇年代後半から明治時代初期まで、およそ二三〇年間にわたる対馬藩の藩政記録が残されており、対馬歴史民俗資料館に現在七二、一二九点収蔵しています。

平成十五年(二〇〇三)は「江戸開府四〇〇年」として、江戸時代の歴史や文化が脚光を浴びておりました。対馬の藩政記録「宗家文庫史料」は研究者の間では、膨大な量の史料が残されていること、さらには他の藩に例のない国際色豊かな内容が記されている史料として学術的に高い評価を受けています。

その「宗家文庫史料」が長崎県及び対馬の関係者の御尽力により、今年度、一括購入されました。この史料購入は島民の長年の念願であり、「対馬市誕生」を迎えるのと時を同じくして、地元・対馬にこ

新 知 故 温

館長 平山 武彦



の貴重な史料が残されるようになったことは、たいへん喜ばしいことであるとともに、何か因縁めいたものを感じます。私たちは、先人の残したいろいろな記録や生活文化などから、先人の知恵に学び、現代に生かしていくことが大切だと考えます。その重要な鍵をにぎる「宗家文庫史料」を今後どのように有効活用していくか、また、どのような情報提供ができるかなど、私たちに課せられた課題は大きなものがあります。

最近の対馬といえば、過疎化と高齢化の加速、猪鹿の繁殖及び被害拡大、基幹産業の不振など問題を抱えています。特に人口の減少は顕著で、昭和三十五年(一九六〇)のピーク時には六九、五五六人もいた人口が、四十三年後の平成十五年十一月末現在で四〇、九八一人となつています。中でも若者の島外流出は歯止めがきかず、減少の大きな要因となっています。今回、「対馬市」の発足に伴い、「新市建設計画」などにおいて、今後の対馬地域の振興を図るためのいろいろな構想が立てられています。その中の一つに、対馬の地理的、歴史的条件を活かし、東アジアと日本を結ぶ拠点として対馬をとらえ、広域的な交流を促進することによって、対馬の活性化を図ろうというまちづくり構想があります。

す。そのような構想の具現化のために、国内及び韓国からの多くの観光客や研究者が訪れる対馬歴史民俗資料館は、対馬の歴史・文化の情報発信の拠点として重要な役割を担っていると考えています。新生「対馬市」の今後の発展のために、対馬の歴史や文化及び先人に学ぶ場所として、今後ますます本館が皆様のお役に立つことができれば幸いです。

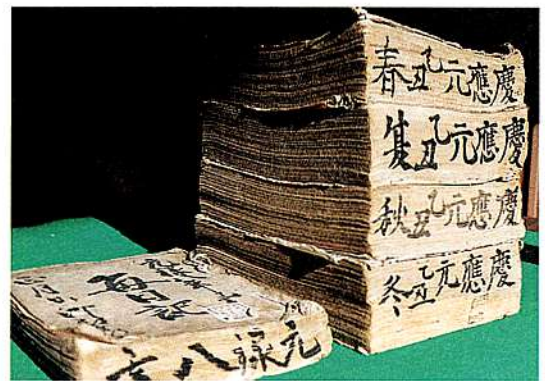
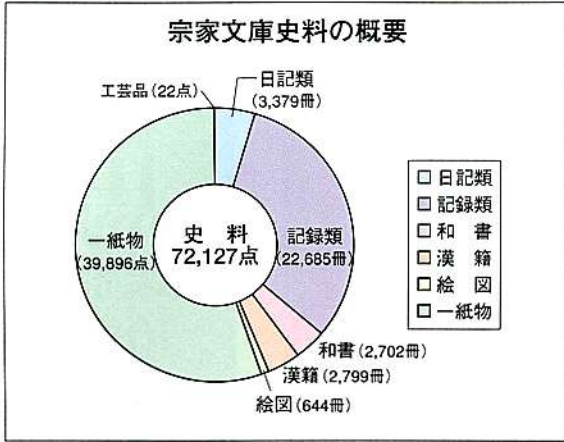
宗家文庫史料

一括購入が実現

平成十五年度、長崎県及び地元の負担により、旧対馬藩主・宗家に伝わる「宗家文庫史料」七二、一二七点を購入いたしました。

その「宗家文庫史料」とはどのようなものなのか、簡単に紹介します。

宗家は鎌倉時代中期（十三世紀後半）から明治維新（十九世紀後半）までおよそ六百年間にわたって対馬を治めていました。「宗家文庫史料」はその中で、一六三〇年代後半から明治維新までのおよそ二三〇年



元禄8年(1695)と慶応元年(1865)の1年間分の御郡方毎日記。時代の経過とともに記載内容も増えていきました。

間にわたって記録された膨大な量の記録つづりです。

その史料は、対馬藩庁、対馬藩江戸藩邸、釜山の倭館などで記録、保管されていたもので、その数は十数万点にも上るといわれています。しかし、積み重なる歲月とともにその保管について変遷があり、現在では長崎県立対馬歴史民俗資料館をはじめ、国内では文化庁、東京国立博物館、国立国会図書館、東京大学史料編纂所、慶応大学図書館、国外では韓国国史編纂委員会に分蔵されています。

そのような中で、今回、購入された史料は、本館が宗家より寄託を受けて保管していたものです。

次に、本館で収蔵している「宗家文庫史料」の分類についてですが、

日記類、記録類、漢籍、和書、一紙物、絵図類、工芸品に大別しています。

(一) 日記類

日記類に対馬藩政の中心的な記録が残されています。対馬藩庁の各部署（表書札方、奥書札方、御郡方など）で記されたもの、或いは対馬藩江戸藩邸の国元控え、更に釜山の倭館での日記なども見られ、江戸時代の対馬藩政の様子や朝鮮国との交流史を知る手がかりとなります。

現存する「毎日記」では寛永十一年（一六三四）のものが最も古いのですが、以降、明治時代初期までの三、三七九冊の日記が残っています。

(二) 記録類

対馬藩の各部署で作成された、いろいろな内容（幕府から出る奉書・令達類の控及び対馬藩内の令達事項の控関係、家臣奉公関係、社寺関係、巡検使関係、朝鮮国関係、漂流民関係など）の記録です。全部で二二、六八五冊あります。特に、対馬藩の特権知行の実態を把握できる御判物控や朝鮮国との外交・貿易関係及び朝鮮通信使に関する記録は他に類例のない対馬藩特有の史料です。

(三) 漢籍

漢字ばかりで書かれた書籍であり、

中国刊本、朝鮮刊本、日本刊本に大別しています。二、七九九冊あります。特に朝鮮刊本は、江戸時代の対馬と朝鮮国との文化交流を示すものです。

(四) 和書

日本で書かれた書籍であり、二、七〇二冊あります。伝存本の少ない貴重な書もあります。

(五) 一紙物

一紙物は、一枚ないし数枚を貼り継いだ紙に書かれているものをいいます。書状、覚え書き、書き付け、願書、廻達状などがあります。

(六) 絵図類

絵図類は地図や見取り図です。府中をはじめ、対馬島内の地域絵図などがあります。

(七) 工芸品

亀卜や宗家什物など、二十二点あります。

これらの中には調査中で非公開の史料もありますが、目録のそろっている日記類や記録類などの冊子類は現在、多くの研究者の方に活用いただいています。

江戸時代の対馬のくらしを探る

— 宗家文庫史料による

天気調査を通して—

一 はじめに

自然現象の影響を受けやすい生活をしてきた江戸時代の対馬の人々はどうのような生活をしていたのでしょ
うか。

この平成十五年は全国的に梅雨明けが遅れ、長雨による日照不足や低温(冷夏)に見舞われました。大きな台風や集中豪雨が人々の生活圏を直撃し甚大な被害をもたらしました。

私たちの住む対馬においては、七月二十三日に正午からの一時間に一二・五ミリを観測し、床下浸水やがけ崩れの被害がでています。この梅雨期の総雨量は一、一八七ミリで平年の二倍といわれています(厳原測候所観測)。また、九月十二日の夕方から十三日未明にかけて台風十
四号が対馬を直撃しました。厳原測候所観測史上最高の風速四十六・五メートルを記録し、防波堤が決壊したり、道路が陥没するなど、対馬西海岸
帯を中心にした大きな被害が出ました。

さらに遠く海外においても欧州の異常高温、北米の巨大ハリケーンの襲来と地球規模で異変がおきているといわれています。



宗家文庫史料 宝永7年(1710)
「御郡方毎日記」

さて、このようにいろいろな地域で異常とも思える天候が続いた一年でしたが、江戸時代の対馬地方の天気はどのようなであったか、今年と対比してみたく、本館収蔵の宗家文庫史料「毎日記」によって調べてみました。

二 調査にあたって

本館が収蔵している宗家文庫史料のうち、今回の調査で中心史料として用いたのは、対馬藩庁の「御郡方毎日記」です。その理由は、対馬藩の農政に関する日記であり、人々の生活の様子がかがえること、寛文十一年(一六七二)以降、連続して史料が現存していること、特に延宝二年(一六七四)から享保元年(一七二六)までの日記には天気とともに風向きが継続的に記入されていた

ことなどからです。

その中には天気が記されていない日もあります。それについては他の部署の日記(表書札方毎日記)と奥書札方毎日記と与頭方毎日記の順で調べることにしました。

これらの膨大な数の史料の調査は極めてたいへんな作業であり、四名の職員で範囲を分担して調査を進めました。その結果、約二ヶ月間かかって寛永十四年(一六三七)から明治元年(一八六八)までの天気調べが終了し、その後、データの集計、分析を行いました。以下にその一部を紹介します。

三 調査結果について

(一) 天気と風向き

① 天気用語

本館で収蔵している宗家文庫史料の「毎日記」の中で、天気と風向きをとくに記録しているのは、御郡方毎日記(四十二年間)と表書札方毎日記(二十三年間)です。その他は天気のみ記載でしたが、これらの史料により、天気や風向きの表現がいろいろあることがわかりました。

図1はその天気の用語です。単純に「晴天」、「曇天」、「降水現象」の三つに分けてみました。

まず、「晴天」についてですが、同じ晴れでも快晴と晴天を使い分けられているのは現代の気象用語と変わり

ません。しかし、「天気よし」や「吉」など対馬地方独特の表現かと思われ
るもの、また、太陽がきらきらと照
りつけている暑い夏の空を表現した
「旱天」、更にはぼんやりとかすん
でいる春の空を表現したと思われる
「蒼天」の用語に江戸時代の人々の
自然を見つめる風情を感じます。

次に「曇天」ですが、「暈天」や「陰天」という独特の用語がありま
した。前者は太陽や月にかさがか
かっている様子、後者は今にも雨が
降り出さそうなきような、どんよりとし
た分厚い雲が全天を覆っている暗い
空模様が想像できます。

最後の「降水現象」の表現も、そ
の降り方の特徴を言い当てており、
その様子を容易に想像できます。た
とえば「照降」は照ったり、降った
り、俗に言う「天気雨」のことを指
しているのでしょうか。また、「甚雨」
はひどく降り続く雨にうんざりして
いる人々の様子が目に浮かんできま
す。

ところが、このような天気用語の
中で最も判断が難しかったのは、「
半天」と記された空模様でした。
晴れたり、曇ったりという現象なの
か、それとも全天の雲の量を表して
いるのか、いろいろな推測が飛び交
いました。ちなみに本館収蔵の宗家
文庫史料での「半天」の初出は、表
書札方毎日記で寛永十四年(一六三
七)三月二十日、御郡方毎日記では

図2 「半天」の天気調べ（一部抜粋）

	御郡方毎日記	表書札方毎日記	奥書札方毎日記
元禄10年 7月5日 14日	半天 々	陰天朝雨天 晴天	曇天時々雨降る 晴天朝少し雨降る
元禄11年 1月29日 10日 11日 15日 7月22日 9月27日 12月1日 15日	半天 々 々 々 々 々 々 々	晴天 曇天 曇天 記載無 朝雨天昼晴天 雨天 雨天 雨天	朝雨天昼より晴天 雨天昼より晴天 朝雨天昼より晴 晴天時々雨降 記載無 晴天昼より時々雨降る 朝雨天昼時より晴天に成る 朝雨天巳ノ刻より晴天
元禄12年 1月24日 7月28日	半天 々	記載無 雨天	朝晴天昼過ぎより雨天 曇天時々打降
元禄13年 5月4日 10月20日	半天 々	雨天 曇天昼より雨天	雨天午中刻より晴天 晴天昼より雨天
元禄14年 1月6日 6月4日	半天 々	曇天未ノ下刻より雨天 晴天打ふり	晴天夜に入雪降 晴天申刻より雨天

図1 天気のいろいろな表現

晴天	・晴天・天気良・天気よし・天気吉・天気能・吉・快晴・青天・旱天・半晴天・蒼天・寒天
曇天	・曇天・暈天・陰天
降水現象	・雨天・照降・半雨天・半雨・細雨・雷電・甚雨・大雨・終日雨・雨風・風雨・雷雨・霧雨・雪降る
保留	・半天

図3 史料の中に記されている風向き

東	・東・東南・穴東・東北・こち
西	・西・西南・中西・沖西・真西・中西穴・穴西・中西穴西・西北・西穴・西洋・中西アナゼ
南	・南・南西・穴南・南真西・辰巳・南東・沖南真西・沖南西・沖南・南押穴・南風真西・沖南沖西・大南・仲南・巽風・はえ・南大風・押穴南
北	・北・北穴・北アナジ・北東・あなせ・北あなせ・乾・北乾・北西・あなじ・北穴西・北あなじ・北こち・北アナゼ・穴風・押穴

延宝三年（一六七五）四月二十一日であり、四十年ほど後になります。ここでは、三つの部署の日記が揃う元禄十年（一六九七）から同十四年（一七一五）までの五年間のうち、御郡方毎日記で「半天」と記されていた日を他の二つの部署の日記ではどのように記録されているか調べてみました。それが図2です。

その結果、「朝雨天昼より晴天」「陰天昼より雨」「朝曇り昼雨」などという記録が多くみられました。これらにより、「半天」の示す意味は、一日のうちの前半と後半、現在の午前と午後で空模様が変わったとき、それも降水現象がみられたときといえるのではないのでしょうか。

次に、風向きについてですが、毎日記の中に記されていた風向きを示した用語は図3のとおりです。方位を東西南北の四方位に分け、分類してみました。いろいろな表現があることに驚かされます。

このことから、まず対馬藩の方位のとらえ方について考えてみました。その風向きのいろいろな用語を方角別に分けてみると図4-①のよう（十二支では辰）と南東（巳）の中間を示す「辰巳」や「巽」、それに西北（戌）と北西（亥）の中間の「乾」の用語がみられることから北と東、東と南、南と西、西と北、それぞれに中間の方角があったことを示しています。

どうやら対馬藩は、十二支による方位を基本として、中間の方角は「うしとら」、「たつみ」、「ひつじさる」、「いぬい」というように隣接す

図4-① 江戸時代の風向き

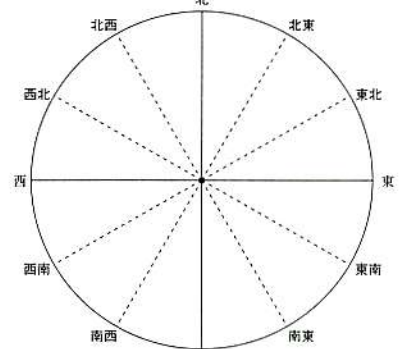
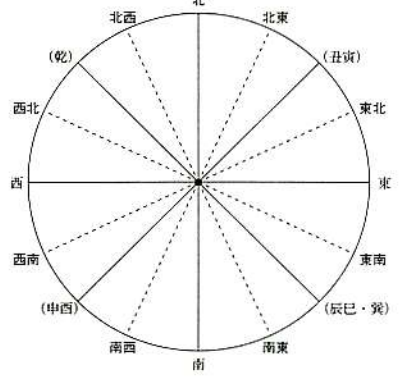


図4-② 江戸時代の風向き



る十二支を組み合わせて使っていたのではないかと推測できます。（図②）

なお、「あなじ」「あなせ」「あなせ」「こち」など、語尾に「じ」「せ」「ぜ」「ち」をつけていますが、これらはいずれも風を意味する語です。ちなみに、「あなじ」や「あなせ」の風向きについて、地元の漁師さんに尋ねてみると、「あなじ」も「あなせ」も同じ風向きで、北北西の風を表しているとのことでした。この「あなじ」は海が荒れるため、海に携わる人々からきらわれる風のようなでした。

また、「穴風」や「押穴」と表現されたものも「あなじ」のことと考えられます。それで「押穴」はあなじの風が次々と続いて吹いている様子を示しているのではないのでしょうか。続いて、「沖西」とか「沖南」という「沖」のついた用語の解釈です。この毎日記が記された部署はいずれ

図 6-① 1710年(宝永7年)の風向とその日数

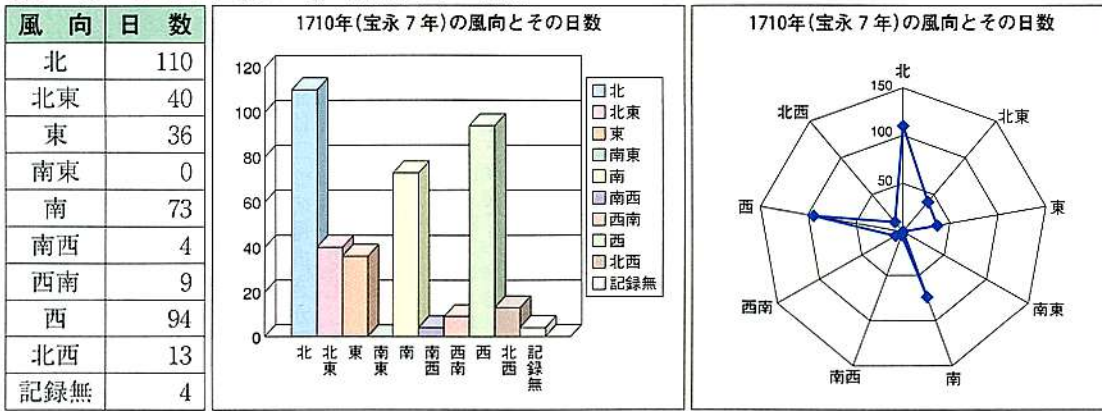


図 6-② 晴れの日々の風向

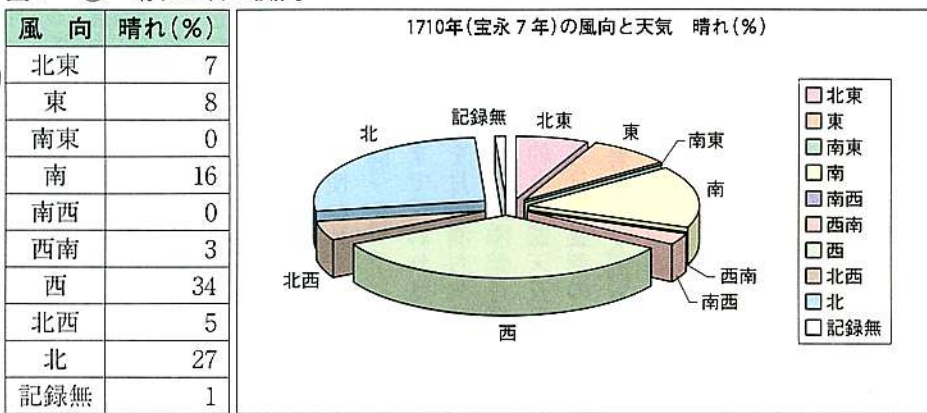


図 6-③ 曇りの日々の風向

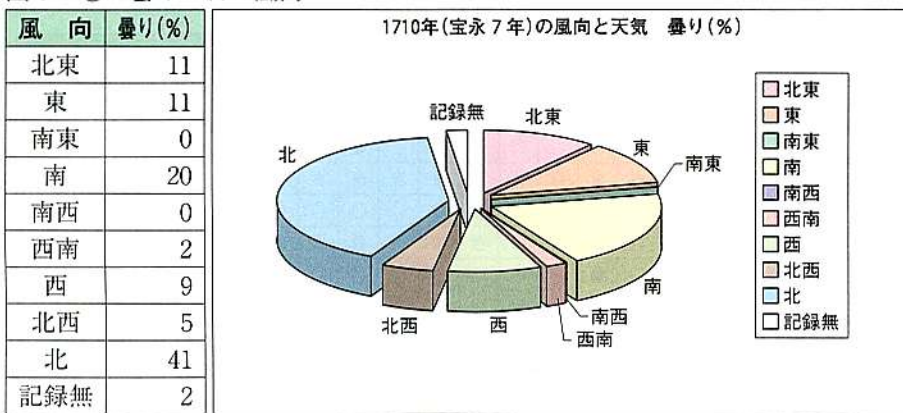


図 6-④ 雨・雪・霧の日々の風向

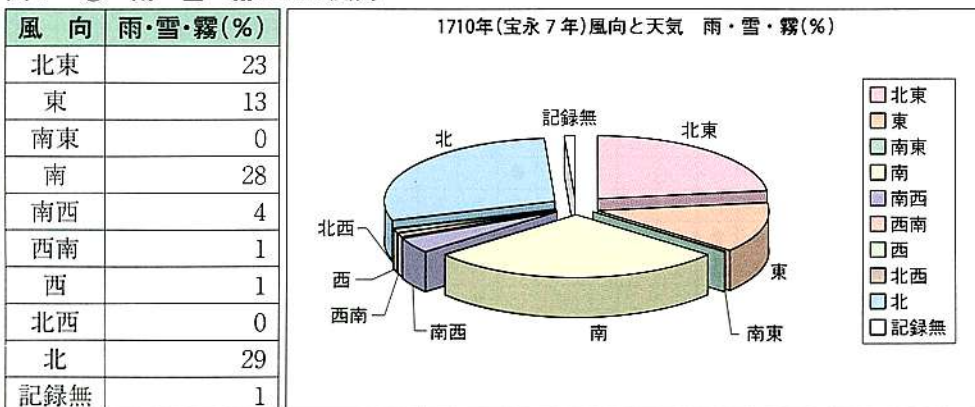
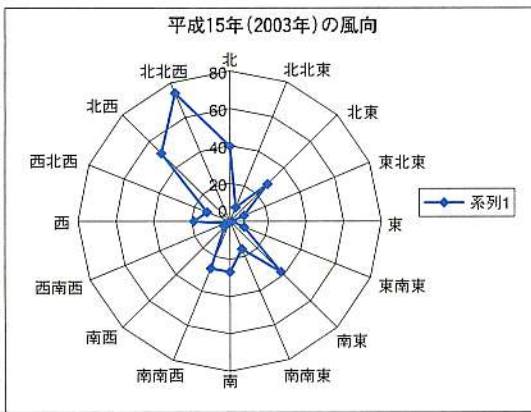


図7 平成15年(2003年)の風向

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
北		4	2	3	2	2	6	6	4	5	6	0	40
北北東	1	1	2	1	1	0	0	0	0	2	0	0	8
北東	0	1	6	0	11	1	2	1	5	1	0	0	28
東北東	0	0	0	0	0	1	3	1	2	0	1	0	8
東	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
東南東	0	0	0	3	5	0	0	0	0	0	0	0	8
南東	1	2	1	1	3	6	0	8	5	3	7	1	38
南南東	1	1	1	5	0	3	1	0	1	0	2	1	16
南	0	2	3	4	2	6	7	2	0	1	0	0	27
南南西	0	0	1	1	0	2	8	8	5	1	0	1	27
南西	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2	4
西南西	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	3
西	4	0	1	5	0	2	0	0	1	2	1	3	19
西北西	3	0	0	2	1	0	2	0	0	1	1	3	13
北西	13	7	3	1	0	1	0	1	0	8	5	12	51
北北西	8	10	11	3	6	3	2	3	6	7	7	8	74
計	31	28	31	30	31	30	31	31	30	31	30	31	365

平成15年(2003年)の風向

北	40
北北東	8
北東	28
東北東	8
東	1
東南東	8
南東	38
南南東	16
南	27
南南西	27
南西	4
西南西	3
西	19
西北西	13
北西	51
北北西	74



それが半月から一ヶ月ほどずれが生じてくることがあります。このように今の暦と江戸時代の暦では季節的なことを比較するにはいくらかずれが生じることを念頭に入れておかなければいけません。なお、表の中の三月二十七日(新暦四月二十五日)の

書札」とあるのは、御郡方毎日記に天気の記事がなかったので表書札方毎日記で調べたことを表しています。さて、図5の結果をもとにして風向きと天気の関係を示したのが図6です。

図6-①は宝永七年(一七一〇)の風向きとその日数を表したものです。北風と西風、それに南風が際だつて多く吹いていることがわかります。一年のうちでは、冬に北から西にかけての風が多く吹き、夏頃に南寄りの風が多いことが顕著です。

図7は厳原測候所観測による対馬の今年の風向きのデータです。冬季は北北西を中心にして北から北西の季節風が吹き、夏季には南東の風を中心とした南よりの季節風が吹いています。このことは、風向きについては江戸時代も現在も同じ傾向であることを示しています。人間の経験と知恵で、科学の発達した現代の観測結果と遜色のない確かな情報を残していることに驚きとすばらしさを感じます。

次に、図6-②から④は風向きと天気

の関係のみたものです。このことから、西風の時は「晴れ」や「曇り」で、降水現象がほとんどみられないこと、また、反対に降水現象がみられるときは南風や北風が吹いたときということがいえるようです。

ところで、この年の六月二十七日(新暦七月二十三日)に「大風」が吹いたことが御郡方毎日記に記録されていました。

六月廿七日

今朝辰之刻迄ハ北風辰之刻よりハ東南之大風雨ニ而当浦へ繋ギ居リ旅船并御国船共二八艘辰之中刻破船右二旅船之内水夫壱人溺死仕ル

午前九時ごろまで北風が強く吹きそれ以後は東南からの風が変わって吹くようになります。風向きやその変化及び死者が出るほどの荒れた天候であったことから、この「大風雨」は現在の「台風」を指しているようです。台風は風が反時計回りに回転しながらその中心に向かって吹き込んでいます。通常は風も雨も伴っていますが、一般的に進行方向の右側は風が強く、左側は雨が激しく降るといわれています。とするならば、この風の吹き付ける方向の変わりようから、この大風雨は対馬の東側、対馬海峡を通り過ぎたものと考えられます。この通過コースは対馬の東海岸一帯に住む



宗家文庫史料
記録類Ⅲ「防備」

人々が恐れる進み方です。実際に同日記の七月晦日にそのときの被害状況が記録されていました。

七月晦日

去月廿七日之風雨二付八郷損毛

高之

覚

- 一 田作三百八拾五石 但初メ
- 一 畑作四千五百四十九石四斗五升
- 一 倒家百八十九軒
- 一 倒小屋三十四軒 但納屋 既共
- 一 破船十壹艘 但四段帆 三段帆
- 一 杉九本 但御立山之内
- 一 竹三百九十本 但御林之内
- 一 鱚網式状半流ル
- 一 大船越地関崩ル

このように全島的に大きな被害をもたらししているようです。この他に

図 8

西暦	元号	月日	記事
一六三三	寛永十四年	十月十九日	夜半時分大風吹
一六五一	慶安 四年	八月十六日	夜五ツ時分卯ノ刻迄朱外大風ニ而御座候
一六五六	明暦 二年	七月 三日	今未明方大風 御城中破損多シ
一六六九	寛文 九年	七月十八日	夜二入雨風頻ニ強候ニ付
一六七三	寛文十三年	八月 九日	大風吹候付而何御機嫌之御書状參出
一六七八	延宝 六年	八月 六日	御国大風雨ニ候入津候旅船破損
一六八二	天和 二年	八月 三日	今日雨天大水出候付府内及破損候依之府内町中破損之様子書付參出
一七〇六	宝永 三年	八月十六日	今寅ノ刻方卯ノ下刻迄大風雨ニ而所々破損仕ル
一七一〇	宝永 七年	六月廿七日	今朝大風故濱之様子為見分之
一七一 一	正徳 元年	七月 一日	昨廿九日夜半方東風大風雨ニ而今朝ニ至押穴ニ成卯ノ刻方辰ノ刻迄之間別而風浪強府内外屋らい少しも不残崩ル
〃	〃	七月廿二日	今日大風雨ニ而信使朝鮮船内屋らい江警置候処少々損ジ其外日本船も破又ハ損で外屋らい所々打崩ス
一七二三	正徳 三年	六月十四日	御国大風雨御船家少々風損
一七二五	正徳 五年	八月十七日	今晚大風雨ニ而致破損候所々畧之
一七二五	享保 十年	八月 三日	今晚大風雨ニ而破損等も数艘有之
〃	〃	八月十七日	昨晩方大風雨ニ而御城内御屋敷其外所々役所番所并御家中寺社町屋久田御船家共夥敷破損
一七四五	延享 二年	八月十四日	昨夜子刻頃方東風ニ而大風雨相成未方東南西風ニナリ段々吹募漸今晚方穩相成

も史料の中には大風雨による被害が記録に残されています。図8は(出火洪水大風地震)記録より抜粋したものです。寛永十年(一六三三)から延享二年(一七四五)の間の記録ですが、その多くが七月から八月にかけて対馬地方を通過していることがわかります。新暦になおすのだいたい八月から十月ごろとなりますが、東シナ海を北上し、朝鮮半島を通過して日本海へ入るといふこの時期のコースに今も昔も変わりはないようです。

このように対馬の自然災害は夏場に多いことがわかりますが、今からちょうど三百年前の春に痛ましい海難事故が起こっています。

それは、朝鮮王朝が江戸時代、対馬に派遣した公式の使節団を「訳官使」と呼んでいます。元禄十六年(一七〇三)二月五日(新暦三月二十一日)、対馬藩主宗家の慶弔のために朝鮮海峡を渡り、対馬を目指していたその訳官使一行が、対馬を目前に急変した天気のために、鰐浦沖で百八名全員が遭難するという惨事です。

その年の二月七日付けの「表書札方毎日記」に、

訳官百八人乗一艘裁判山川作左衛門乗船并引船一艘去ル五日朝は中西風ニ而朝鮮出帆仕候処昼時より強風沖南風ニ成大風波高

と、当時の状況が生々しく記録されています。朝は北西の風で順風満帆の船出であったのに、昼になると次第に強い南風に変わり、波も高くなってきました。午後一時半ごろからは西風に変わり、その強さも一段と増していることがうかがえます。帆を下げ、何とか危険を回避すべく懸命な努力をしていた訳官使を乗せた船は必死の願いもむなしく、対馬まであと八キロメートル余りという鰐浦沖の南風ノ波瀬付近で海中に姿を消してしまいました。

この出来事は対馬の自然の猛威を象徴した最悪の悲劇といえます。鰐浦の小高い山の上には一九九一年に「朝鮮国訳官使殉難之碑」が建立されています。そして遭難後ちょうど三百年を迎えるにあたり、同じ場所に、遭難した訳官使並びに従者全員の名前を刻んだ追悼碑「朝鮮国訳官使従者殉難霊位」が建立されました。

クハツ過より沖西風弥強ク吹其節作左衛門乗船佐須奈より二里程之所江乗掛候節訳官船おくれ居候付作左衛門乗船帆をさけ半時斗待合候得共次第第二風強成候故作左衛門乗船并引船は大浦江乗込申候訳官乗船鰐浦より二里余程之所はえのは方へ寄添相見へ候処帆を下ケ暫は船見へ候得共其以後は船も相見江不申候

と、当時の状況が生々しく記録されています。朝は北西の風で順風満帆の船出であったのに、昼になると次第に強い南風に変わり、波も高くなってきました。午後一時半ごろからは西風に変わり、その強さも一段と増していることがうかがえます。帆を下げ、何とか危険を回避すべく懸命な努力を

図 9 伊能忠敬が測量したときの天気

		3/28	3/29	3/30	4/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
対馬藩測量御用記録(本隊)	天気	☉	☉	☉	●	☉時々	☉時々	☉	×	×	○	○	○	○	○	●	●大雨	●→○	○
	地名	府中	〃	〃	〃	阿須ノ難知	根緒ノ大船越	大船越ノ小船越	浅海内ノ玉調	玉調ノ狭瀬戸	久須保ノ緒方浦	鴨居瀬	沖ノ鳥ノ久須保	犬吹ノ沖ノ鳥	小船越ノ小島	住吉瀬戸ノ長崎通り	〃	ミ七濱ノ横浦之濱	芦浦寺越ノ賀谷浦
対馬藩測量御用記録(支援隊)	天気				☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉	○	○	○	○	○	●	●	○→☉
	地名				御船江口ノ久和	久和	内山ノ豆飯の峠	幸土ノ濱ノこふ先	こふ先ノ内院	久和濱ノ豆飯	豆飯ノ北瀬	瀬ノ久根	小茂田ノ今里	今里ノ廻	池ノ濱ノ佐保	〃	網浦ノこぶの崎	小網ノ田	
対馬藩御郡方毎日記	天気	○	☉	☉	●	●	☉	●	⊕	○	○	○	○	○	☉	☉	●	○	○
	地名	府中	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
備考		新暦4/28一日朝中時	測量開始														測量休		

(三) 対馬の北と南
宗家文庫史料の中で、府中以外の地域の天気が記録されているのは

		16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	5/1	2	3	4
対馬藩測量御用記録(本隊)	天気	○	○	○	○	○	☉	●	☉	○	●→○	○	○	○	☉	○	○	☉→●	●→○
	地名	浦底ノ千尋漢	曾ノ藪	志多賀ノ茂木	五根緒ノ唐舟志	舟志ノ濱久須	恩殿崎ノ西泊	泉ノ舌崎	豊ノ大ひつ	豊浦ノ鰐浦	測量休	三ツ島ノ鬼ヶ崎	鬼ヶ崎ノ大浦	豊ノ古里	比田勝ノ舟志	舟志ノ佐須奈	舟志ノ一重	一重ノ志多賀	志多賀ノ佐賀
対馬藩測量御用記録(支援隊)	天気	○	○	○	○	○	○	●	☉	×	●→○	○	○	○	☉	○	○	☉	○
	地名	網島	銘ノ吉田	木坂ノ三根	木坂ノ鹿見	鹿見ノ伊奈	高瀬ノ伊奈	伊奈崎ノ田ノ濱	苺生ノ湊	湊ノ佐須奈	〃	佐須奈ノ大浦	大浦ノ浜辺	西津屋ノ佐須奈	佐須奈ノ湊浜辺	深山ノ志多賀	舟志ノ一重	久原ノ吉田	吉田ノ仁位
対馬藩御郡方毎日記	天気	○	○	○	☉	○	☉	●	☉	○	●	○	○	○	○	○	○	●	○
	地名	府中	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
備考				霞							朝鮮山を測る		朝鮮山を測る						

「対馬藩測量御用記録」です。これは寛政十二年(一八〇〇)から十七年間にわたって日本全国の諸街道や

		5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
対馬藩測量御用記録(本隊)	天気	○	○	○	○	○	○	○	○	●	●	●	○	☉	☉	☉	●	●	○
	地名	佐賀ノ曾	曾ノ和板	和板ノ草島外	和板ノ小船越	西ノ越手ノ島山	大船越ノ西ノ濱	島山	久須濱ノ昼ヶ浦	〃	箕形ノ黒瀬	箕形ノ難知	難知ノ府中	府中	〃	〃	〃	〃	〃
対馬藩測量御用記録(支援隊)	天気	○	○	○	○	○	○	○	○	●	●	☉	○	本隊と合流					
	地名	仁位ノ糸瀬	糸瀬浦	睦我ノ貝鮒	在家ノ濱ノ和多数美	仁位ノ濱ノニタ敷浦	佐保ノ貝口	ふかりノ廻崎	今里ノ吹崎	加志ノ今里	吹崎ノ箕形	今里ノ府中	小茂田ノ佐須崎	本隊と合流					
対馬藩御郡方毎日記	天気	○	○	○	○	○	○	○	☉	●	●	☉	○	○	○	○	☉	☉	○
	地名	府中	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
備考								朝鮮山を測る	測量休				測量終了	有明山に漆気	不順ニ付滞船	風待ち	〃	〃	卯刻出船

海岸を測量した伊能忠敬が対馬の測量に来たとき、対馬藩の役人が同行して記録したものです。

伊能忠敬測量隊一行は文化十年（一八一三）三月二十八日（新曆四月二十八日）に対馬・府中に上陸し、同五月二十二日（新曆六月二十日）に対馬を離れるまで五十四日間対馬に滞在しました。図9は測量隊長一行が測量のために訪れた地区と府中の天気と比較したものです。

測量隊の府中以外での滞在は四十日ですが、一割程度、府中との天気の違いがみられます。晴天のときは全島の晴れ間が広がっているようですが、曇り空のときに地域によつて雨が落ちていたり、落ちていなかったりという状況がみられます。

総じて、この期間の対馬の天気は全島の同じ傾向の天気だったようですが、南北に細長い対馬の天気は風向きによつて北と南、東と西で異なることがあります。例えば、北東の風が吹いてくると島の北東側の地域は晴天となりますが、南西側の地域は曇天であるといった具合です。他に極端な例では東西十八キロメートルしかない島ですが、西側が晴れていても東側で雨という日もあります。更に風向きによつて東西、南北の海のしけとなぎの両極端な現象はよくあることです。

さて、この測量記録をみますと、測量隊一行が測量をするうえで、天気に臨機応変に対応できる考えをもっていたことがわかります。

三月廿八日

御一手ハ府中浦より東面を南ニ夫より西面を北ニ御向ヒ浅海を御残し被成郷崎より廻り崎に御通り鰐浦迄ニ而東西御引結可被成其内暴風ニ而海辺難成日ニハ街道筋或ハ天気ニ依高山ニも御上り可被成少々之雨ニ候ハバ市中御測量可有之候

烈風が吹くなど明らかに悪天候の場合は測量を休みにしていますが、それ以外は、その日の天気や風の状況によつて、測量場所及び測量時間の変更を効率よく行っており、実質四十五日間ほどで対馬測量を終了しています。

無事に対馬での測量を終え、次の目的地である五島へ向かおうとしていたところ、不順な風のため、四日間も風待ちをして、五日目の朝ようやく出船できたことも対馬ならではのことでした。

四 天保の飢饉と対馬

「天保の飢饉」とは、天保四年（一八三三）から同七年（一八三六）にかけての全国的な飢饉をいいます。享保の飢饉、天明の飢饉と並ぶ江戸時代の三大飢饉です。天保初年（一八三〇）より天候不順が続いたようですが、特に天保四年の春から続いた冷害のほか、夏場の長雨、暴風雨など天候の不順があつています。更に同七年には全国的な凶作となつて全国各地に深刻な事態をもたらしています。この時、対馬はどのような状況だったのでしょいか。

図10は天保四年から同七年にかけての対馬の月別の天気をグラフに表したものです。いずれの年も五月から六月にかけて晴天は最も谷間に、雨天は山になって、似た傾向を示しています。特に天保六年と七年は雨が五月から六月（天保六年は新曆では五月二十七日から七月二十五日、天保七年は六月十四日から八月十一日まで）が旧曆の五月から六月にあたる）にかけて集中的に降つています。このことが日照不足になり、冷夏とつたと思われまふ。

天保七年八月の御郡方毎日記には次のように記されておりました。

八月十五日

熊与申達候當年四月下旬五月初より雨降続…(略)…
気候不順ニ相成不思議千萬近年

二難相較冷氣ニ有之多月之雨天
二候得ハ蕎麦木庭を焼候儀全不相成其外秋物之仕付方ニ相障甚以不安年向ニ付順氣之御祈禱被仰付被下段申上候處
上ニおるても御憂慮之余り木坂於八幡宮重御祈禱被 仰出

四月下旬から五月初旬にかけて雨が降り続き、あわせて気温も低い状態であつたため、秋になつての収穫の出来が心配されています。そのため、天気がよくなることを願う御祈禱が行われたようです。

ところが同年十二月十二日の記録によると

當年気候不順ニ有之別而田作之儀者植付之時分より潤雨過土用中ニ至冷氣ニ有之全体実リ之勢無之悉枯腐御年貢難成相見候付佐護三根仁位与良佐須豆酸之六郷願出ニ依見分被 仰付候処凶作無相違近年稀成不作ニ而種をも失候村方有之由天災とハ申ながら苦々數儀共ニ而令憂念事候

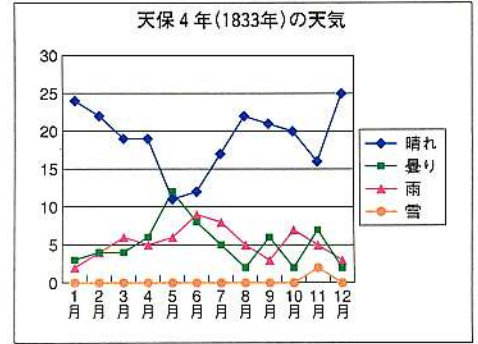
とあり、やはり対馬においても全国同様、凶作であつたことがうかがえます。更に、次の年に植え付けるための種も確保できない状況におかれていたようであり、当時の人々の苦悩が伝わってきます。



宗家文庫史料
測量御用記録

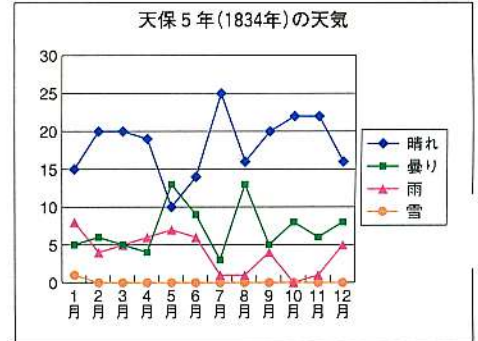
図10 天保4年(1833年)の天気

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
晴れ	24	22	19	19	11	12	17	22	21	20	16	25	228
曇り	3	4	4	6	12	8	5	2	6	2	7	2	61
雨	2	4	6	5	6	9	8	5	3	7	5	3	63
雪	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
記録無し	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	29	30	29	30	29	29	30	29	30	29	30	30	354



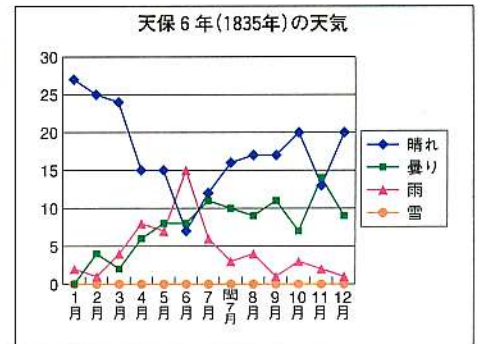
天保5年(1834年)の天気

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
晴れ	15	20	20	19	10	14	25	16	20	22	22	16	219
曇り	5	6	5	4	13	9	3	13	5	8	6	8	85
雨	8	4	5	6	7	6	1	1	4	0	1	5	48
雪	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
記録無し	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
計	29	30	30	29	30	29	29	30	29	30	29	30	354



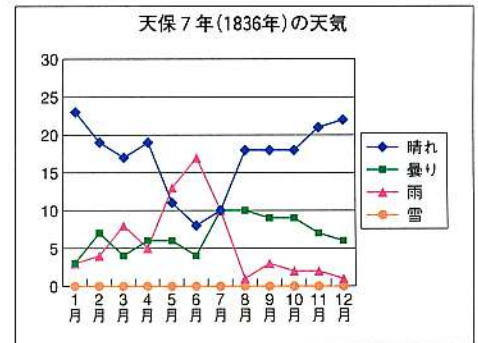
天保6年(1835年)の天気

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	閏7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
晴れ	27	25	24	15	15	7	12	16	17	17	20	13	20	228
曇り	0	4	2	6	8	8	11	10	9	11	7	14	9	99
雨	2	1	4	8	7	15	6	3	4	1	3	2	1	57
雪	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
記録無し	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	29	30	30	29	30	30	29	29	30	29	30	29	30	384



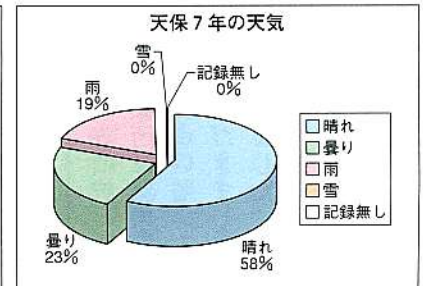
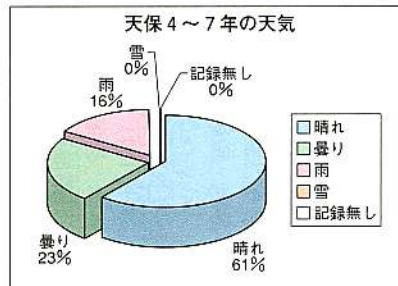
天保7年(1836年)の天気

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
晴れ	23	19	17	19	11	8	10	18	18	18	21	22	204
曇り	3	7	4	6	6	4	10	10	9	9	7	6	81
雨	3	4	8	5	13	17	10	1	3	2	2	1	69
雪	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
記録無し	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	29	30	29	30	30	29	30	29	30	29	30	29	354



天保4～7年の天気

	天保4年	天保5年	天保6年	天保7年	合計	平均
晴れ	228	219	228	204	879	219.75
曇り	61	85	99	81	326	81.5
雨	63	48	57	69	237	59.25
雪	2	1	0	0	3	0.75
記録無し	0	1	0	0	1	0.25
計	354	354	384	354	1446	361.5

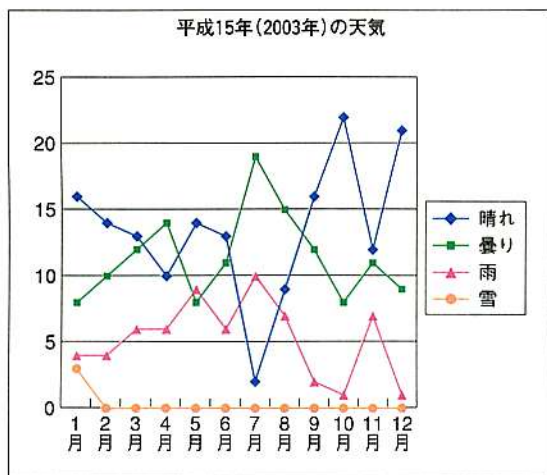


晴れ	879
曇り	326
雨	237
雪	3
記録無し	1
計	1446

晴れ	204
曇り	81
雨	69
雪	0
記録無し	0
計	354

図11 平成15年(2003年)の天気

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
晴れ	16	14	13	10	14	13	2	9	16	22	12	21	162
曇り	8	10	12	14	8	11	19	15	12	8	11	9	137
雨	4	4	6	6	9	6	10	7	2	1	7	1	63
雪	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
計	31	28	31	30	31	30	31	31	30	31	30	31	365



晴れ	162
曇り	137
雨	63
雪	3

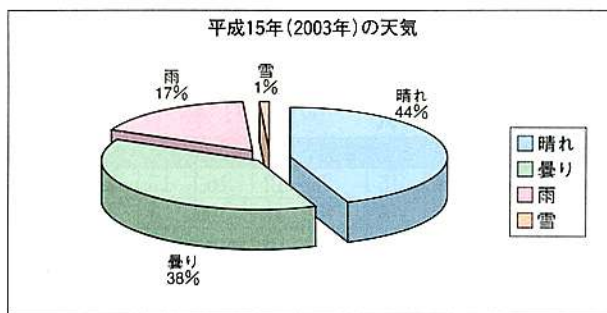


図11は今年の対馬の天気データの。七月に曇りや雨の日が多く、日照不足であることが明らかです。また、九月、十月は極端に晴天の日が多く、小雨であったことなど、天保六年と七年のデータと非常に類似しています。

四 おわりに

対馬の地形は、そのほとんどが山であり、人々の主要交通手段は海上交通だったのではないかと思われる。そのため、日々の生活の中で天気や風の様子を把握することは大切なことでした。

江戸時代の対馬の天気を調べていくうちに、自然の力の偉大さを改めて感じるとともに、それに対する対馬の先人の経験に基づいた知恵と努力が今の世にも脈々と生き続けていることを感じました。例えば、寒さ厳しい朝鮮半島からの吹き下ろしの防御のために石屋根や石壁を考案したこと、或いは、慢性的な食糧難の対策として橙ぼのやほなど木の実や芋を保存したり、山島・段島作り、新田開発など、乏しい耕地面積の拡大を図っていることなどです。

近年、地球規模の「エルニーニョ現象」、「オゾン層の破壊」、「二酸化炭素等による温暖化」という環境の変化の問題をよく耳にします。これらの影響で、いつ、どのような自然

災害が発生するかわかりません。今、その防災と対応について人々の関心も高まっているようです。

このように、いつの時代も、自然の偉大さの前で人間の非力さを痛感させられています。私たちは、私たちの生活が、時には自然の脅威にさらされながらも、一方ではその恩恵を多く受けていることを認識し、自然と共存していく手だてを構築していかなければいけないと考えます。

参考文献

- ・「国史大辞典」吉川弘文館
- ・「厳原町誌」厳原町
- ・「鰐浦沖遭難訳官使姓名簿の発見」小松勝助 長崎県立対馬歴史民俗資料館報(第二十号)
- ・「元禄十六年鰐浦沖破船訳官船の流失人參をめぐって」齋藤弘征 長崎県立対馬歴史民俗資料館報(第二十四号)
- ・「伊能忠敬長崎測量・測量日記編」入江正利
- ・「暦」国立国会図書館 (インターネット)
- ・「調べる江戸時代」柏書房

調査研究にあたっては、厳原測候所に気象用語や気象情報などについていろいろとご教示をいただきました。ありがとうございました。

スポットライト

古文書の保存について

本館では、原文書保護のため、虫食いが見られたり、水損などで傷んでいる史料について、裏打ち補修とマイクロフィルム化しています。

前回の館報第二十六号で、傷みのひどい史料を補修する「修復作業」について紹介しました。そこで今回は、修復を終えた古文書がマイクロフィルム化、更にはプリントアウト化される工程を紹介します。

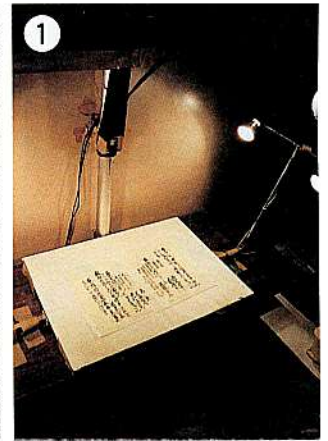
この作業には二名の研究員が取り組んでいます。

① マイクロフィルムカメラで撮影する。

② フィルム現像（業者委託）後、用紙に印刷する。

③ 印刷した用紙に番号をつける。

④ 製本する。



⑤ 複製文書を収納する。

傷みがひどく、今まで閲覧不可能だった史料が「修復」→「マイクロフィルム化」→「プリントアウト化」の一連の工程を通して複製文書として生き返り、研究者に活用されています。

対馬歴史民俗資料館 入館者状況

表1～2は、過去五年間の入館者状況です。

表1は、館内展示物を見学する「一般入館」と、宗家文庫史料をはじめとする収蔵資料の閲覧及び調査などの「研究入館」に分けています。その「研究入館」の中の小中高生は、社会科学見学や総合的な学習の時間など、調べ学習のため、学校教育の一環として来館した人数です。

そして、一般入館者数を地域別にまとめたのが表2です。毎年、韓国から訪れる入館者は増えていますが、平成十五年は特

に急増しています。国際交流の促進を図る官民一体の努力のおかげだと思います。韓国からの観光客は、対馬の豊かな自然や朝鮮半島との関わりが深い対馬の歴史にとっても関心があるようです。展示資料の歴史的背景などを知っていたために、本館では、展示物のハンダール解説版を少しずつ増設しています。

表3は、平成十五年の都道府県別入館者数のベストテンです。第一位の地元・長崎県は個人や小グループで訪れる方が多いのですが、二位以降のそれぞれの都道府県は旅行業者企画による団体の方が殆どです。

表1 年別（1月～12月）入館者総数

種別 年	入館者数						総計
	一般入館			研究入館			
	成人	小中高	小計	成人	小中高		
11年	9,738	542	10,280	387	128	10,795	
12年	16,098	870	16,968	363	145	17,476	
13年	19,022	954	19,976	329	268	20,573	
14年	17,377	687	18,064	311	304	18,679	
15年	19,250	648	19,898	365	118	20,381	

表2 地域別一般入館者数

地域 年	島内	島外					総計
		九州	関西	関東	東北・北海道	外国	
11年	1,189	3,823	1,399	2,136	180	1,553	10,280
12年	1,096	4,719	3,140	2,784	369	4,860	16,968
13年	1,379	4,627	4,292	3,721	760	5,197	19,976
14年	1,300	5,008	3,354	1,704	419	6,279	18,064
15年	960	3,477	2,739	2,751	554	9,417	19,898

表3 平成15年 都道府県別入館者数ベスト10

1位	2位	3位	4位	5位	平成15年 1月から 12月まで
長崎県 1,784	福岡県 1,693	東京都 1,685	大阪府 524	北海道 449	
6位	7位	8位	9位	10位	
神奈川県 416	群馬県 342	徳島県 256	愛知県 213	山口県 207	



韓国からの来館者も一段と増加しました。

平成十五年 古文書読み方講習会

七月五日(土)六日(日)の二日間、厳原町中央公民館を会場に地元の方々を対象にした古文書読み方講習会を実施しました。この講習会も今年で四年目を迎え、ある程度軌道にのってきました。そこで、本年度は、ぜひ地元で古文書を使つてという思いから、宗家文庫史料を使用し、地元の金田小学校大森公善先生を講師にお迎えし、初級程度の内容を指導していただきました。



難解なくずし字も前後の文脈からあたりをつけて…

ただ古文書を讀むだけでなく、史料の歴史的背景や当時の対馬の生活の様子などの解説を織り交ぜた手法は、受講者にとつても分かりやすく、また、質問に対しては丁寧に教えていただきました。き充実した講習会となりました。今回使用した主なテキストの内容は次のとおりでした。

- 訂正 新體讀本 巻五
- 勇魚取絵詞
- 対馬藩「信使記録」
- 「表書札毎日記」
- 「対馬藩主御返答」
- 「年行事並町人御返答」
- 「町切番所書付」

中学生のための 「郷土の歴史散策講座」

昨年引き続き、八月一日(金)、夏休み期間中に中学生を対象とした「郷土の歴史散策講座」を厳原中央公民館で実施しました。

私たちが住んでいる対馬は、現在でも「宗家文庫史料」をはじめ、いろいろな古文書や数多くの遺跡などの歴史的な文化遺産が残っています。そこで、郷土の将来を担う中学生の対馬の歴史学習への理解に少しでも役立てばという思いでこの講座を開きました。

まず、対馬の歴史を知るといこうと、対馬の誕生から、その名の由来、主な歴史上の出来事など紹介しました。その後、宗家文庫史料を使って、対馬の地名や朝鮮通信使の記録などの読み方を学習しました。午後は、対馬藩主宗家菩提寺の万松院や朝鮮通信使の客館跡など厳原の史跡を散策しました。

受講生は、厳原中、西部中、東部の生徒十六名と教師二人と募集定



対馬藩主菩提寺、万松院にて



文化8年(1811)の朝鮮通信使ゆかりの地、国分寺にて

員を超え、そして、どの生徒も熱心に取り組んでいました。特に、対馬の歴史については、初めて耳にすることが多く、驚いていたようでした。また、古文書の読み方では、くずし字や変体がなという特殊な文字に初めて触れたということでも戸惑いも多少あったようです。しかし、学習を進めていくにつれ、自分たちでも徐々に読めるようになり、時折喜びの声もあがっていました。会場を後にする子どもたちの顔がとても満足したように見えました。

社会科見学や総合的な 学習の時間への対応

これまで、多くの小・中学生が、郷土学習のために来館しています。私たち資料館職員も児童・生徒の学習の目的に応じて、可能な限りの資料提供や説明をするように心がけています。個人・小グループでも気軽に活用ください。

なお、対馬の歴史に関する質問な



よく見、よく聞いて…熱心に「郷土学習」に取り組んでいます



どは、電話やFAXでも受け付けています。

資料の寄贈を受けました

平成十五年、当館へ資料の御寄贈をいただいた方を紹介いたします。

- 小島健二氏 長崎市在住
- ・久和家御判物

- 長松寺 上対馬町琴
- ・高麗版大般若経マイクロフィルム

ありがとうございました。

平成十五年職員

- | | |
|-------|------|
| 館長(兼) | 平山武彦 |
| 課長(兼) | 岩村知康 |
| 係長(兼) | 小山満信 |
| 学芸員補 | 山崎義久 |
| 学芸員補 | 松島修二 |
| 学芸員補 | 中山弘之 |
| 学芸員補 | 河合徹 |
| 学芸員補 | 椎葉徳子 |
| 学芸員補 | 藤本祐子 |
| 学芸員補 | 権藤安子 |